



2012年11月15日 発行
 2012年秋号
 <第20号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/下野英世 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 works-union@y3.dion.ne.jp http://www.v-aid.org/union/

つよくなりたい

ぼくは、ふうせんバレーがだい好きですよ。
 れんしゅうにも、ほとんどごんかしていますよ。
 たのしいですよ。

しあいにもたいかいにもさんかをしていますよ。

たいかいではうまいひとがたくさんいて、しあいにはまけて、すねちゃったです。

かったときには、うれしかった。

もつとふうせんバレーをしたいですよ。

ふうせんバレーがアタックが、好きですよ。

たいかいにでたいですよ。もつとまくなりたいですよ。みんなといっしょにしたいですよ。

ゆうしょうしたいですよ。アタックがはずれたときはくやしいですよ。

もつともつとふうせんバレーにたくさんひとがきてくれたいですよ。

中武 武士

生活を支える

生活担当に変わり、事業所とはまた違った難しさを感じています。タイムケアではない、人の生活に関わり支えることの難しさ、何を考えどう伝えるか、職員は日々悩みながら支援しています。

事業所では、「ルール」「協力」という言葉で行動を促すことがありました。「仕事だから好きなことばかりはできません。」「皆で使うものだからきれいに使しましょう。」

しかし、生活にルールはありません。もちろん、他人と共用しているスペースや物、時間などにはあります。が、個人の生活の中では「こう生活しなければいけない」というものは、ほとんどないのではないかと思います。

例えば、掃除です。それぞれの居室を見てみると、きれいに整頓された部屋、物やチラシであふれている部屋と、さまざまです。虫がわくほどの汚さでなければ、自分だけで使用する部屋がどれ

だけ散らかっていても、誰にも迷惑はかかりません。むしろ本人にとつては、その環境が便利で居心地の良い場合もあるでしょう。

ですが、「それなら仕方ない、本人の自由だから。」と、何も言わずに見守ることが支援なのか。ふと考えさせられます。きれいにする習慣がなかったり、掃除の仕方がわからないだけで、きれいにしているとその環境が気持ちいいと感じるかもしれません。

ある日、一人の利用者さんが「なくした物を探したい」と言うので手伝いました。床、ベッド下の引き出し、タンス、押入れ、どこもかしこも大量の物やチラシが一杯で、捜索も兼ねて2時間の大掃除になりました。ご本人が「なんで

なくなるのかな。」とぼやくので、「これだけ散らかってたら、そりゃ物もなくなるよ。」とチクリと嫌味を言うと、「そうやな、片付けよつか。」と笑っていました。

以前は人が部屋に入ること拒否していましたが、今はヘルパーや職員と一緒に掃除する機会も増えました。掃除をし、また散らかり、その繰り返しですが、本人のストレスにならない程度に定期的に行つていけたらいいなと思つています。

食についても、職員としては色々考えさせられます。年々ふくよかになっていく利用者さん達の姿を見ると、お茶碗にご飯をてんこ盛りに入れてある場面に遭遇した日には、やはり言いたくない一言を言ってしまうます。「もう少し少なくて盛りませんか。」そう言われたときの利用者さんはなんと渋い顔で、しやもじに渾身の力を込めてご飯を押し付け、少なく見えるように工夫します。利用者さ

んに話を聞くと、「病気になるのは嫌、でもお腹一杯食べたいねん。」そんな言葉が聞かれます。

そんな中、血糖値が大幅に上がってしまった利用者さんがいました。医師にその事の重大さを告げられた彼は、それまでは好きなだけ買っていたジュースやお菓子を我慢し、パンのマーガリンをやめ、地道に努力しました。すると二

目でわかる程スリムになり、血糖値も下がってきました。人に言われるよりも、自分でその気になったときに発するパワーの大きさに、とても感心させられました。

無理なくできるところからと、世話人さんとも相談し、数ヶ月前からケアホームのご飯に玄米を混ぜて炊いてもらっています。いつもと違う茶色いご飯を見て、「今日は炊き込みご飯やね」「白いご飯の方がおいしいな」という声もあり、玄米の量を調整して様子を見ながら行ってきました。

ワークスユニオンの生活支

援は、基本的に「二人では困難な部分を支援し、それぞれの自由な生活を支える」というものです。それでも実際に日々利用者さんの生活を間近で見る私達支援者にとつて、どこまで利用者さんの生活に介入すべきか、「自由」と「責任」の境はどこなのか、迷う場面が多々出てきます。

利用者さんの好きなように生活してほしいと願う一方で、保護者の方に変わり近くで見守る者として、こんな風にしたらより豊かで健全な生活になるのではと思うことを、提案していきたいとも思うのです。

しかし、何が豊かな生活なのかということは何も人それぞれであり、職員の価値観を押し付けてはいけません。本来なら自由なはずの生活が窮屈なものになってしまわないよう、利用者さんとの関係を築きながら、本人自身が「そうしよう」と思えるような声かけや促しを心がけていきたいと思

(野々村)

「ありのまま」の 支援って何だろう？

『ありのまま』の支援という言葉は、ワークスユニオンの目指す支援の代名詞とも言えるものになっていくかもしれない。

9月某日、事前に選出された機関紙委員の数名で『ありのまま』の支援について議論をする機会を設けた。その議論をもとに、各職員が考えたこと、これまでに考えてきたことを記事にしてみたいと思う。

横田の思い

自分は以前まで、ありのままの支援とは、その言葉通りありのままの利用者を受け入れ、そのありのままの状態を維持していくために支援することだと思っていた。その為、当時は新たに利用者の力を伸ばすような支援はしていなかったし、現状の利用者のことしか見えていなかったと思う。

支援への価値観が一気に変わってしまった。その職員が支援した利用者は、明らかに以前と比べて良い表情で過ごしており、情緒面での変化が顕著であった。自分は数年その利用者としてきたが、そのような変化や支援を望んでいたことは想像もつかなかった。

そのケースがあつてからは、利用者が何を求めているのか、自分がどうなりたいかと、本人のニーズを改めて考えるようになり、こちらからも色々な選択肢を利用者に提案するようになった。

ただ、利用者はそういった新しい提案に対して、経験したことがないために拒否的になる事もある。

しかし、拒否的であつても一度経験した上でどうするか決めてもらう事で本当のニーズを見極められると思う。

誰でも新しいことを始めるのは怖いし不安だと思いが、そこを「怖いけど一回やってみようかな」と感じさせられるよう職員は常に工夫して支援する必要があると思う。

そして「なぜその支援を行っているか」支援の方向性を説明できなければ、拒否的な利用者に対して無理矢理職員の価値観を押し付けていると、保護者や周りから虐待だと捉えられてしまうかもしれない。そうならないよう職員間でしっかりと支援の方向性を考えなければならぬ。



先日、ユニオンで掲げる「ありのまま」の支援について、職員数名で座談会を行った。どの職員もありのままの支援についての解釈は様々で、どの意見も間違っているとは思わなかったが、これだけ職員間での意識が統一されていない事は、利用者にとって良い事ではないと思う。ユニオンの多数の職員が「ありのまま」という言葉に悩まされてしまっているのではないだろうか。

「ありのまま」とは、どのような状態を指すのだろうか。「現状を善しとする」という意味ではないかと思うものの、そう解釈する余地が残ってしまうその言葉を聞く度に、考え込んでしまう自分がいた。

といっても、「ありのまま」とは「能力以上のことを求めないこと」と解釈すると、私の中である程度消化できてしまったので、ある時からその言葉自体に執着しなくなってしまった。そのため、こうして改めて記事を書くことになっても、何を書いていいものかと悩んでしまう。

言葉の意味だけを考え続

原の思い

けるよりも、利用者一人ひとりのこと、家族のことや置かれている環境などを考えていく方が、『支援とは何か』という答えのない問いに、少しづつでも近づいていけるように思った。

私が利用者との関わりの中で大事にしてきたことは、彼らに選択の幅を持つてもらうことだ。自分の意思で選んでもらうために、それぞれの利用者にとってわかりやすい表現をしたり、時に通訳士のような役割を担ったりするように意識し、一緒に悩みながら利用者との関係を築くことも同時に心がけてきた。

誰にとってもそうであるように、何かを選ぶには状況を理解してからでないかと判断のしようがない。どうしてそれが必要なのか、それを選んだ先に何かあるのか。見通しが立たない中では、前に進めない人も多い。言葉の上では伝わっているようなやりとりがあったとしても、その本質を伝える

ことは容易ではない。うまく伝えられたとしても踏ん切りがつかない人もいるのだから、まずはきちんと伝えることを支援者がしているかなければ、利用者の内面には何も働きかけることが出来ないのではと思っている。

とはいえ、利用者が望む選択ばかりではもちろんない。多くの場合は行きたくないところに好きなだけ行って、買いたいものを欲しいだけ買うことは出来ない。やりたいことを我慢しなければいけないこともある。病院に行きたくないと思っても、健康のために行かなければならない時もある。

だとすれば、『ありのまま』の支援とは一体何か。たとえば、計算をすることが難しい人に対して、ずっと計算の仕方を教え続けるも、あまり意味がないことのように思う。本当にそれがその人の生活に必要なか？ 買い物のために必要なのであれば、財布を店員さんに見せることができれば

事足りるのかもしれない。出来ないことを出来るようにすることが支援ではないし、それ以外の環境に働きかけて、その人らしく生きる手助けをすることの方が望ましい場合もたくさんあるだろう。

利用者の真意は見えにくい。良くも悪くも、職員をはじめとする支援者の言動が利用者及び影響を考えると、利用者の言葉を鵜呑みにして、支援者の思いだけで突き進むことはとても危険だ。利用者の気持ちを受け入れた上で、一人ひとりに合った方法でバランスをとり、寄り添う存在になったり、時にそつと背中を押す存在になったりする人が、彼らには必要なのではないかと感じている。

その時々々の彼らの言動のきっかけを探し、どのような理解で現状を捉えているのかを考えることから全ては始まり、そこに立ち返っていくように思う。その中で見えてくる彼らの『あり

のまま』を受け入れたその先に、本当の支援があるのかもしれない。

観の違いからトラブルが生じてしまうこともある。

そんな時、『ありのまま』という言葉が頭をよぎる。利用者の『ありのまま』を支援する。言葉通りに解釈すると、『今の状態をそのまま受け止めて、支援する』となるだろう。

高橋の想い

生活支援を行う部署では、『ありのまま』というキーワードにぶつかることが多いように思う。

居宅介護制度を活用して生活している利用者は、ヘルパーと一緒に部屋の掃除をすることがある。

利用者にとっては『意味あるもの』でも、支援に入るヘルパーにとってはそう思えない場合もあり、価値

これまで、ユニオンで言われる『ありのまま』という言葉の理解が曖昧で、一般的な解釈で支援に当たっていた。そのため、『散らかった部屋』も利用者の一部として考えてしまい、どう支援すべきなのだろうか？ と、悩みと葛藤を感じていた。

散らかっている部屋は、衛生上の問題がある。しかし、職員やヘルパーが主体的に掃除することは、支援の方法として抵抗がある。利用者も、部屋は綺麗になってもスッキリした気分にはならないだろう…。

担当職員がこのような思いで揺れていたため、ヘルパーに対して、ユニオン流の支援スタンスが伝達でき

ていたかを振り返ると、うまく伝達ができていない部分もあったように感じる。

もしかすると、支援でトラブルが起きる原因は、そこにあるかもしれない。

改めて、ユニオン流の「ありのままの」支援について話し合った。その結果、「あなたらしく生きるための支援」と言い換えることができ、「これ以上頑張らなくても良いですよ」と声かけするような支援と表現できると思う。

現在に至るまで、指導や訓練といわれ、個性や性格までも軽視されるような環境で生活してきた利用者がいるからこそ、このスタンスが生まれたことも改めて理解することができた。

今後は、利用者に関わるすべての人へ、具体的にユニオン流の支援とはどのようなものか伝えていき、支援者間で共有していかなければならないと感じた。

「想い」がなければ、支援はできない。しかし、職

員側の「想い」のベクトルが利用者の思うそれと違う方向なのかもしれない。

実際支援を行ううえで、思いが違うことで、悩むことが幾度もあり、利用者と対立することもある。利用者にとっては自分の人生だからいたって当たり前だと思ふ。また、職員側の「想い」が強すぎると支援から離れてしまい、指導や訓練と同じレベルとなるかもしれない。

そのような時には一歩立ち止まり、利用者と一緒に悩むこともユニオン流の支援になるのではないか？これもまた、実践してみてもいいのか、予見違いなのかを確かめてみたい。

まずは、今回の話し合いをきっかけにして、ユニオンの支援方法について再検討し、職員間で共有することから始めなければいけないのではないか。ユニオン流の「ありのまま」の支援が少しずつ、着実に浸透することを願いながら。

ふうせんバレーの挑戦!

くもつと強くなりたい!

昨秋から始めた『ふうせんバレー』。やり始めは盛り上がったものの、寒い冬には人が集まらず、自然消滅するかとも思われました。

そんな時、毎年大阪で行われる公式大会の話が舞い込んできました。それならもう少し頑張ろうか、そんな怪しい気持ちでの参加でした。

6月の大阪大会。異様な熱気と、速い玉が飛び交う真剣勝負の会場も初体験です。全28チーム中、ユニオンからは3チームが出場。ユニオンは一番レベルの低いブロックでの参戦です。

とは言え、他は試合経験のあるチームがほとんど。それでも、ブロック優勝するチームもあり、初参加ながらの健闘でした。

Aさんは、ユニオンでは一番強いアタックの持ち主。ユニオンで最強チームでの

参加に、自信满满で大会に臨みました。ところが試合の途中からリズムが崩れ、順位決定戦では全敗。その日、Aさんは仲間のなぐさめにも耳を貸さず、一日押し黙っていました。

ブロック優勝したBさん。ムードメーカーでチームを引っ張り、粘り強いラリーの末の大金星。しかしBさんは「相手がミスしたから」と淡々とした様子。

そんな二人も、大会の次の日には何事もなかったかの様です。あまりの反応の薄さに、職員間で今後は大会参加を目的にせず、お楽しみ程度で続けようとの方向性が話し合われました。

9月の大会も見送ることにしました。ところが、...

大会から一か月。久々にメンバーが体育館に集まりました。すると、Aさんがアタックの猛練習を始めたのです。大会で見たトップチームを真似て力強く。

Bさんは当然のように秋の大会出場の話をしめます。

「え？大会出るの？」驚いた職員が尋ねると、Bさんだけでなく大会に参加した全員がうなずいています。

それから職員は、あわててメ切間近の関西大会にエントリーしたのでした。

関西大会では、大阪大会よりもメンバーが8名増え、練習にも熱が入りました。しかし、ふうせんバレーを始めてからわずかに一年。残念ながら勝つことはできませんでした。でも、以前とメンバーの顔は違います。

当然のように「全国大会はいつ？」と聞いてきます。皆、大会に勝ちたいのです。

Cさんが、関西大会終了後にぼそつと話しました。「アタッカーになりたい。」

いつもAさんにふうせんを回す役のCさんの心も、何か動き出しているようです。大会終了後、Aさんの感想です。「くやしかったです。もつと強くなりたい。」

チャレンジは始まったばかりです。

(坂田)



山川氏も私も、私たちワークスユニオンの利用者は、「一般就労」や「地域の自立生活」の試みに失敗した人たちや断念した人たちだから再び「一般就労」や「地域の自立生活」を利用者に求めるのではなく、彼らの「在りのまま」を受け入れ、彼らに「充実した生活」が提供できる「支援」を目指そうと伝えてきた。

若い何名かの職員たちは、私たちが言う「彼らの在りのままを受け入れる」と言う言葉を、字句通りに受け止め、その人の一人に迷惑を掛ける行動や「問題となる行動」も全て受け入れなければならぬと捉え、支援をどう組み立てればよいのか悩んでいたことが分かった。

岡山の通勤寮時代には、彼らに「一般就労の継続」と「地域の自立生活」を求めて、障害を克服させるべく、私もかなり手厳しい指導を展開していた。

しかし、数十年の月日が流れ、克服すべき課題と捉えられていた「障害」の考え方も大きく変わり、本人の特性と捉えられるようになった。

私たちは、彼らの「障害」を受容した上で、彼らの「生きにくさ」を少しでも改善し、彼らの「充実した人生」の実現をめざしたい。

ンが出来ると言う理由からハワイの海が一番好きで、行ってみたい海はバリだそうです。怪我覚悟でチャレンジしないと乗れない程、難しい波だそうです。

健康的できれいな小麦色の肌をしている彼女に、同じ女性として気になる「しみ・そばかす対策」を聞いてみると、年中焼いているので大丈夫との返事が・・・。余り聞いた事がないと思いますが彼女は「ごまアレルギー」を持っているので食事に誘う時はごまを避けて誘ってあげてください。

お二人と食事に行くときはごましやぶしやぶは御法度ということでお願います。

(島村・助野)

編集後記

▼ワークスユニオンのキーワードに「ありのままを認める」「守りの支援」があります。総括会議では毎年のようにこの言葉が議論され、結論が出ないままに終わります。▼それでも現場は利用者と対峙し、今の支援が彼らの負担になっていないか、新しい取り組みは彼らのありのままを崩すことにつながらないか、日々迷いながら進み続けています。

▼今回「思いを伝える機関紙」を書くにはどんなことがいいのだろうと意見を出し合うと、やはり多くの委員がこのテーマを選びました。▼座談会形式でそれぞれの思いや悩みを出し合い、充実した時間となりましたが、今回も結論は出ないままでした。結論を出してはいけないのかもしれませんが、座談会に参加し、「ありのまま」とは「彼らの人生を否定しない」ことだと再確認した一日でした。(S)

職員紹介

はまの 清野 祐佳 (毛) 短冊灯

世界の全てを見たいという願望を持っている彼女。過去には、インド、イギリス、ドイツと渡り歩いて生活してきたという、ワールドワイドに活動しています。趣味は、仏像巡り。ちなみに一番好きな仏像は、京都三十三間堂にある千体千手観音立像だそうです。

「仏像は色んな顔を持っていてから魅力的」と彼女は語ります。三十三間堂に寄った際には、是非見つけましょう。

パークハイツではちょっと有名な話ですが彼女は「肉は余り食べない」とのことなので食事に誘う時は、野菜系がお勧めです。

東 静香 (毛) ケアホーム

「昨日の波は、どんな感じやった？」と月曜の合言葉。そうです。彼女はサーフィンが趣味で時間が有れば海に出かけています。

気軽に楽しくサーフィ